運動の指導的地位にあるミュンツェンベルグとの意味か、左翼が未
だ明確でなく漠然としてゐないかと私は思ふ。然し此の問
題の把握には可なり注目すべき事柄があらうと考へる。

階級文芸の問題。

此の問題と無論有島氏の「一つの宣言」によつて起された所
産である。加藤一夫、佐野袈裟美、小牧近江、前田河
廣、小川未明、津田光造等が各主張した、其の言ふ所は
斯うである。

我等の階級闘争がはつきりと、そして深刻化されて来
た今日、我が文壇に於てもブルジョア芸術に対するプロレ
タリアの芸術が起らねばならぬ。芸術は我々大衆の生まれた
血と肉とから生まれる。而して我等階級闘争の革命は
当然芸術に反映せねばならぬ。反映するとすれば其処に階
級闘争が現れて来るのは勿論である。そして此の階級意
識の傾向は今後ますます押し進められて行くであらう。
そして凡ての作家運動として芸術の上に、プロレタリア側に
立つか、ブルジョア側に立つか、徹底的に其の旗幟を鮮
明にせねばならなくなされるのであらう……

斯くして日本の文壇は漸く階級闘争の目標がはつきりと動
いて来るやうになつた。これがいゝか悪いかは別として、多くの作家
達を斯うして逃れ得ぬものの一歩も中立的な曖昧な立場を
取る者はどんどん押し退けられて一 引きずつて行かれるであらう。
さうしてこれからの日本の凡ての方面に階級意識が深刻化
しはしないかと思推される。日佛露の近代的革命の先駆をした

財團法人 協調會
法人 協調會